ポルトガル共和国の言語状況と北東端地域における少数言語の存在

黒澤直俊

1. ポルトガル共和国の言語状況
2. ポルトガルにおけるアストリアス・レオン語
3. ミランダ語の特徴と研究史
4. 現地調査
5. ミランダ語ポルトガル語対象テキスト例

1. ポルトガル共和国の言語状況

ポルトガルは、ヨーロッパ諸国では比較的早い段階に国境が画定したため、政治的境界線と言語的境界線がよく一致していると言われることがある。王国としてポルトガルが成立するのは 1143 年[1]であるが、領土の分布が現在のような形になるのは、レコンキスタの過程で 1249 年に南部のアルガルベ地方の都市ファーロ Faro が攻略されてからである。アルガルベ地方の領有権は、レオン・カスティーリャ王のアルフォンソ十世賢王（1221-84）も主張し、最終的な帰属がポルトガルとカスティーリャの間で決着するのは、1297 年のアルカニーゼス条約によるが、いずれにせよすでに 13 世紀後半にはポルトガルの行政権の及ぶ範囲は現在とほぼ変わらない状態に達していたと言うことが出来るだろう。この過程で半島北部のロマンス語が南へ広がりポルトガル語を形成するが、ポルトガルでは、ほぼ同時に政治的境界も作られたため、言語境界線と国境がかなり一致する形になった。現在、ポルトガル語の諸方言に関する研究は、1950 年代に行われた調査を出発点とするが[2]、そ

[1]この年、初代ポルトガル王となったアフォンソ・エンリケス（1109-1185）は、ローマ教皇庁の仲介により、従兄弟のレオン・カスティーリャ王アルフォンソ七世（1105-57）と和平条約を調印し、王の称号を認められた。これをもってポルトガル建国の年とするが、カスティーリャと対等の王国になるのは、アフォンソ・エンリケスがローマ教皇と封建的主従関係を結んで正式に国王として認められた 1179 年である。ただし、すでに 1139 年からアフォンソ・エンリケスはポルトガル王を自称しているという。なお、この人名はポルトガル語では Afonso、スペイン語では Alfonso である。ポルトガル地域での古形は Adefonso であるが、Adelfonsus、 Aldefonsus、 Alfonso、 Alefonso、 Ildefonsis などが文証されている。

[2] ポルトガル語の方言研究には、先駆者として José Leite de Vasconcelos（1858-1941）や Manuel Paiva Boléo（1904-1992）があげられる。Leite de Vasconcelos は 1893 年に最初のポルトガル語の方言地図を刊行し、1901 年に博士論文でポルトガル語諸方言を扱い、さらに改訂版の方言地図を 1929 年に出版している。他方、コインブラ大学の Paiva Boléo は言語地理学的方言調査法を導入し、1942 年から郵便による言語調査を開始した。しかし、近代的な組織的研究は、イベリア半島言語地図の関係でポルトガル地域の調査を担当したリスボン大学の Luís Filipe Lindley Cintra（1925-1991）に始ま

れに基づいた言語地図を見ると、ポルトガルの東側を南北に走る国境線沿いでは、北東端の一部の地域を除いて、言語境界線[3]が国境の外側を走っていることがわかる。Cintra 1971 であげられている右図がそれであるが、これは、スペイン側に Alamedilha、Eljas、Valverde del Fresno、 San Martín de Trevejo、 Herrera de Alcántara、 Olivença などガリシア・ポルトガル語に分類される方言が話されている地域が存在するためである。しかし、国の北東端の地域は事情が異なり、ポルトガル国内を言語境界線が割って走る形になっている。トラズジュモンテス Trás-os-Montes 地方のブラガンサ県 Distrito de Bragança の一部はガリシア・ポルトガル語圏の外になり、この地域の伝統的な方言はアストリアス・レオン語に属する言語である。ブラガンサ県のうちでも、ミランダ・ド・ドウロ郡を中心とする地域と、ブラガンサ県のうちブラガンサ郡の北端のリオ・デ・オノール村やグアドラミル村[4]の周辺がそれにあたる。また、ミランダ・ド・ドウロ郡は現地ではテーラ・ダ・ミランダ Terra da Miranda「ミランダの地」などと通称され、その地域的特殊性から「ミランダ地方」などと呼ばれることもある。

ポルトガルでは、このほかに南部の国境に接する Barrancos で話される方言が barranquenho と呼ばれスペイン語とポルトガル語の混成言語であるとされているが、これらを除く大部分の地域は伝統的なポルトガル語の方言が話される領域である。

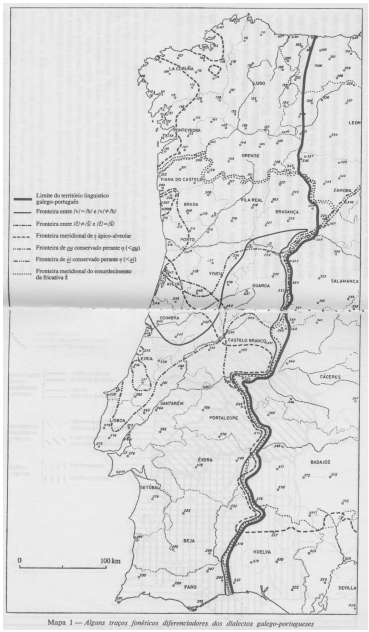
以上のような背景から、伝統的には、ポルトガルは言語的多様性の少ない地域と見なされてきたが、近年、1986 年の EU 加盟に伴う動きや世界的なグローバル化、アフリカ地域の治安の沈静化などの影響により移民などの人口の流動化が進み、特に首都のリスボンでは多言語化が進んでいるような印象を与えることもある。ポルトガル統計院が公開してい

り、1953 年と 54 年にポルトガル全国の調査地点に関する現地調査が行なわれた。ポルトガルと、スペインのガリシア地方を中心に分布するガリシア語の分布域をあわせて、ガリシア・ポルトガル語の言語領域とし、それをさらにガリシア語諸方言、ポルトガル語北部諸方言、ポルトガル語中南部諸方言の 3 つに大きく区分する、現在の考え方はこの調査に基づいたものである。Boléo の研究については、１）方言を分類する言語特徴の選び方が恣意的である、２）分類の根拠が必ずしも言語学的と言えず、むしろ地理的、行政的分類にバイアスされている、３）ポルトガル国内のポルトガル語方言のみを扱い、スペイン側の方言に言及していないばかりか、ポルトガル国内に存在する非ポルトガル語方言の位置づけが曖昧である、４）郵便による調査という、やや不正確な方法に頼りすぎている、など批判がある。

[3] このガリシア・ポルトガル語の東側の境界線は、スペインのアストゥリアス州オヴィエドの西側のあたりから発し、ポルトガルの東側国境にほぼそった形で南北に走っているが、言語特徴としては、ラテン語の母音間の l や n、およびラテン語の短い E と O の二重母音化という 2 点によるものである：ラテン語 salire 出る→ガリシア語 saír；ポルトガル語 sair；スペイン語 salir、ラテン語 luna 月→ガリシア語 lúa；ポルトガル語 lua；スペイン語 luna、ラテン語 petra 石→ガリシア語、ポルトガル語 pedra；スペイン語 piedra、ラテン語 portus 港→ガリシア語、ポルトガル語 porto；スペイン語 puerto。ちなみに、この短い E と O の二重母音化には、一部に誤って信じられているのとは異なり、開音節か閉音節かという音節の構造は関与しない。

[4] 現在では、グアドラミル村は独立した行政区（freguesia）ではなく、リオ・デ・オノール村の一部である。

る資料（http://www.ine.pt/xportal/）によれば、2007 年のポルトガルの住民数は 10,617,517 人であるが、うち 401,612 人が外国人である。統計で国籍別に多い順にみていくと、PALOP（Países Africanos de Língua Oficial Portuguesa「ポルトガル語公用語アフリカ諸国」）と呼ばれるアフリカのポルトガル語圏諸国[5]の出身者が 128,854 人を占め、次に多いのがブラジルで 55,665 人である。それに続くのは、ウクライナ共和国（34,240 人）、スペイン（18,030 人）、ルーマニア共和国（17,200 人）、モルドバ共和国（11,414 人）となる。数字は、一見すると、それほど多いとは見えないが、ポルトガル自体の人口規模や、外国人人口のかなりの部分がリスボンを中心とする首都や地方でも都市部に集中していることなどのために、また、これらは公式統計であり、実際には相当数の不法在留者がいることなどもあって、現実にはやはり外国人の人口が多いという印象を与えているのであろう。実際、不法滞在者や短期滞在の名目で在留している人口は膨大な数になるとする報告も存在する。ポルトガルを 80 年代はじめから観察している者の目から見ると、特に 90 年代にかけて黒人人口が増大した。これはアフリカのモザンビークやアンゴラでの内戦が終息に向かっていたということやポルトガルの移民政策に関連があったものと思われる。近郊の通勤電車の車両を見渡すと 8 割程度が黒人で、まるでアフリカにいるようだと言っていたアフリカ人の友人がいた。16 世紀のヨーロッパ人の旅行記に当時のリスボンはアフリカから連れてこられた黒人が満ちあふれていたために、まるでアフリカのようであるとする記述があることを彷彿とさせるような情景である。その後、90 年代末にかけて、旧東側諸国、特にウクライナやルーマニアなどからの移民人口が増えた。リスボンの下町の駅周辺の路上生活者の 8 割くらいがルーマニア人であったこともあり、ポルトガル人路上生活者から不平の声も挙がったほどである。当時のポルトガルでは最下層の労働をこのような人口が受け持っていたものと思われる。ちょうど、EU からの資金援助もありポルトガル経済が好況を呈していた時代であった。建設労働が低賃金の代表格であるが、この分野では、伝統的にはカーボヴェルデ人労働者が従事していて、リスボン近郊のスラムはそのような人口が集中している地域であったが、ウクライナなどの出



[5] 西アフリカのギニアビサウ（約 170 万人）、アンゴラ（約 1600 万人）と大西洋上のカーボヴェルデ（約 50 万人）、サントメ・プリンシペ（約 16 万人）、東アフリカのモザンビーク（約 2000 万人）の 5 カ国である。ポルトガル語クレオールの存在の有無や現地語との関係などでそれぞれの地域に特徴がある。

身者がこれにかわることになった。もっとも、これら旧東側諸国の出身者は、一般に学歴が高いことが特徴で、ポルトガルに来た当初は言葉のハンディーのために十分に能力を生かせる職に就けない印象があったが、長期的にはポルトガル社会に適応していったのではないかと思う。当時のポルトガル人たちの会話では、家の庭師の下働きや配管工の手下などが、このようなウクライナやルーマニアの人たちで、いろいろ聞いてみるとほとんどが高等教育まで受けている者で、大学卒もたくさんいて、礼儀作法もちゃんとした、こういう人たちが、ろくに教養もなく野蛮な植木屋や配管工の親方[6]にこき使われているのはとてもかわいそうだというようなことが、よく話題にのぼったものであった。80 年代までのポルトガルでは、商店やレストランなど接客を主とする業種で、外国人が働いていることはほとんど見られなかったが、現在では、アフリカ系の黒人やブラジル人、スペイン人などが多く見られる。ただし、一見、多言語化しているような印象も与えかねないが、これらの外国人人口も、相当数がポルトガル語圏からであり、それ以外の地域の出身者たちもポルトガル語を習得し、ポルトガル社会に適応しつつあるというのが現状で、ポルトガルは多言語多文化社会ではないと言われる。

ただし、ここ数年、ポルトガルでは 90 年代以降に誘致された工場の閉鎖や、企業倒産が相次ぎ、経済に暗い影を落としている。EU の拡大の影響もあり、現在すでにかなりの企業が生産拠点をポルトガルから旧東側諸国に移転してしまった。失業率も、まだ現在の世界不況の影響があまり大きくない段階で出された予測では 2009 年には EU 諸国の中で最大レベルの 8%に達すると言われていたが、2009 年春現在の状況から考えると、今後 2, 3 年は悲惨な状況[7]が続くことになるだろう。外国人人口というのは、基本的には流動的な移民労働力であるので、経済の動向の影響を直接的に受けるので、日本におけるブラジル人人口が急速に消滅するように、ポルトガルでも、おそらくここ数年のうちには、外国人人口の割合が劇的に変化することになるだろう。

2. ポルトガルにおけるアストリアス・レオン語

すでに述べたように、ポルトガル北東部のブラガンサ県の一部には非ガリシア・ポルトガル語諸方言が分布する。この地域は、イベリア半島中央部に広がるメセタ高原の西端に

[6] 以前、朝に突然、湯沸かし器が故障し、家の前のカフェーで朝食代わりのブランデーを飲んでいた配管工の親方に修理を依頼したところ、後で勘定を取りにきた 20 代のポルトガル人の青年は、驚くべきことに文盲で請求書の数字が読めないことに気付き驚愕したことがあった。

[7] 70 年代末のポルトガルは、74 年の民主化革命の混乱の後にあり、経済がどん底状態であった。公務員の給与の遅配などがよく話題にされたが、国家規模に比してポルトガルは異常に公務員が多く、財政赤字が極度にふくれあがった現在の状況から考えると、悪夢のようなかつての状況が再現することもさほど遠くないと思われる。

あたり、地理的に孤立性の度合いが高かったことから中世の言語状態がよく保存されたと考えられる。この辺りの地域はトラズジュモンテス Trás-os-Montes 地方の東端にあたるが、ポルトガル語でトラズジュモンテスとは「山の向こう」という意味で、ポルトガルの比較的人口密度が高い沿岸部から見れば、そもそもがはるか彼方の世界である。しかも、トラズジュモンテス地方も大きく二つに分けられ、西側はテーラケンテ Terra Quente「暖かい土地」、東側はテーラフリーア Terra Fria「寒い土地」と呼ばれ、このアストリアス・レオン語諸方言が分布するあたりは後者に属し、まさに極寒の地でもある。15 世紀末のユダヤ人追放令の後、この地域には隠れユダヤが多かったことなどがよく話題にのぼるが、今でこそ、高速道路網が発達し、地域間の移動が比較的便利[8]になったが、かつては陸の孤島以外の何物でもなかった。険しい山岳によってポルトガル「本土」（？）から隔絶され、一方、反対側ではドーロ川の激しい渓谷がスペインからも隔てたのである。ミランダ地域の北側は、一部にスペインと陸続きになっているが、こちらはさして人口のない地域だったので、地域の孤立性には影響がなかったのである。

このような条件の下に、かつて中世にイベリア半島北部のアストリアス地方やレオン地方を中心に分布していた言語が残ったのである。アストリアス地方は、中世のレコンキスタ発祥の地であるが、その後の歴史的変遷の過程で政治的主導権を失ってしまい、結果的に近代国家の形成[9]が起きなかったところである。ポルトガル語は近代国家ポルトガルが成

[8] 高速道網の整備によって、現在では沿岸のポルト市からブラガンサまで車で 1 時間半程度になったが、かつては 10 時間くらいかかったと言われる。トラズジュモンテス地方自体が、そもそも山岳であるので、従来は、そこでの移動は山をのぼったり下りたりすることであった。そのため、現在でも、ミランダ・ド・ドウロからブラガンサまではポルトガル国内を移動することが相変わらず不便で、道がくねくねしているため 2 時間程度かかる。ところが、いったんスペインへ出て移動すると 40 分程度で着いてしまうという奇妙な現象が起きている。ただし、これはドウロ川に橋が架けられたためで、この辺りのドウロ川沿岸は 200 メートルくらいの絶壁からなる渓谷なので、1950 年代に上流にダムが作られる以前は、川が浅く歩いて渡れたといっても、やはり陸の孤島であったことにはちがいがない。

[9] このイベリア半島西北部から中央にかけての地域は、中世においてはレオン王国とカスティーリャ王国が支配していた。レコンキスタにおいてキリスト教側の勢力は、自分たちのことをアストゥリアスのゲルマン王族の後裔であるとみなしていたことに見られるように、ある段階までこの地域の中心はアストリアス王国、そしてそれを引き継ぐレオン王国であった。将来の政治的版図や言語分布を決定的にするに至る出来事は、1065 年にレオン・カスティーリャ王のフェルナンド一世（1016−65）が没した時、遺言に従い王国が 3 人の兄弟に分割相続されたことにある。ガリシアと、当時コインブラのあたりまでのポルトガル北部はガルシア一世（1042−1090）が、そしてカスティーリャはサンチョ二世（1037−72）、レオンはアルフォンソ六世（1040−1109）が相続し治めることになった。ガリシア王国、カスティーリャ王国、レオン王国が並んで成立し、3 人は遺言に従って仲良く助け合って、対イスラムの聖戦を進めるはずであったが、まもなく兄弟間の抗争が起こる。まず、アルフォンソ六世とサンチョ二世が共謀し、ガルシア一世を破り、セヴィーリャに追放する。その後、1072 年にサンチョ二世とアルフォンソ六世が戦い、サンチョ二世が勝利を収めるものの、裏切りによって殺されてしまう。最終的に争いに生き残って、レオン、カスティーリャ、ガリシアの支配者になるのはアルフォンソ六世である。ガルシア一世は実質的な権力は早期に失うものの、形式的には 1090 年に死ぬまでガリシア王であり、この短い間が唯一ガリシア地域が王国として独立し

立していく過程の中で、北のガリシア地方の言語からはなれていき、主にリスボンとコインブラを軸に中南部地域の方言を基礎に規範形成が進むが、ガリシア語やアストリアス・レオン語は近代国家という中心形成の後ろ盾がなかったため、中心のない中世的言語状態が現在まで続いている言語である。特に、アストリアス・レオン語は、かつてはガリシアとポルトガルを合わせたイベリア半島西側帯状の地域とカスティーリャ語の分布域との間のかなり広い地域を占めていたが、現在では、このポルトガルの北東端地域と現在のアストゥリアス州のオヴィエドに限られるほどに分布域を縮小させてしまった。

現存するポルトガル国内におけるアストリアス・レオン語には、次の変種が知られている。

1）リオドノール語 riodonorês, rionorês（Rio de Onor，人口 60 人強）

2）グアドラミル語 guadramilês（Guadramil，人口 20 人強）

3）ミランダ語 mirandés[10]

北部国境方言

中央方言

南部方言（センディン語 sendinês）

リオドノール語はブラガンサ郡のリオ・デ・オノール村で話される言語だが、現在の村の人口は 60 人強で、現在でもこの言語を話すのは 10 名程度であると思われる。リオ・デ・オノール村は、ポルトガルとスペインの国境にまたがる集落で、そもそもがひとつの集落なのであるが、現在ではスペイン側とポルトガル側にはっきりと分かれた形になってはいるものの、そもそもこの村で国境が明確な形で確定されたのは 19 世紀のことで、それまでは村の人口は双方の当局に対して都合に応じて国籍の帰属を使い分けていたらしい。中世の記録によると、スペインとポルトガルの国境付近の村などがお互いに相手の側から略奪

ていた期間である。この頃までポルトガルにあたる地域は、レオン王国の一部とされてきたが、このガルシア一世への相続によってガリシア王国の一部になる。そのためか、今のポルトガル北部の、ポルトカレンセ伯領 Condado Portucalense（あるいはポルトカレ伯領）とされた、ちょうどドウロ川あたりまでの地域を治めていた、土着の貴族で最後のポルトゥカレンセ伯爵であったヌーノ・メンデス Nuno Mendes がガルシア一世に対し反乱を起こし、現在のブラガ Braga の近くのペドローゾ Pedroso で起こった 1071 年 2 月の戦いで殺されてしまう。これにより土着の貴族の血統が絶えルトともにポルトゥカレンセ伯爵が空席になる。その後、アルフォンソ六世が、ガルシア一世の死後、ガリシアとポルトガルをそれぞれブルゴーニュの二人の騎士の兄弟に分封するが、これによりひとつにまとまっていた地域の運命が分かれることになる。1096 年にコインブラあたりまでの地域とあわせて、ポルトゥカレンセ伯領としてブルゴーニュの騎士エンリケがこと地域の支配者になる。もともと自立的性格が強い地域であったためか、その子のアフォンソ・エンリケスが初代ポルトガル王を主張し始めるのである。

[10] ミランダ語の現地語表記は mirandés で、mirandês はポルトガル語である。リオドノール語やグアドラミル語には正字法はないのでポルトガル語表記とした。

や襲撃を受けている時代にあっても、リオ・デ・オノールがその被害者になった記録は存在しないという。また、双方の権力から追われた者たちがリオ・デ・オノールに逃げ込むと、その間は追撃されることもなかったという。この地は、ヨーロッパでよく国境などの辺境地域に形成される、「その地へは何も持ち込むことはならず、またその地の物も外へ持ち出してはならない」特殊な空間ではなかったかとする意見もある。実は、このリオ・デ・オノールと、グアドラミルでは、中世に存在した生産財を村落単位で共有・管理する制度が最近まで残っていたことで、歴史学や地理学、人類学の研究者たちに注目されていた地域であった。

他方、グアドラミル語は、リオ・デ・オノールから数キロのところにある小さな村で話されていた言語で、この二つの村落は現在では共通の行政区分を形成する。現在、グアドラミル語は、ひとりの話し手と、もうひとりの、あまり能動的には話せない話し手の 2 人の老人によって残っているのみで、そう遠くないうちに消滅するものと思われる。このふたつの地域は、後で触れる公用語化に伴う言語運動の外にあるので、遅かれ早かれ消滅することになるだろう。実は、この二つの村落では、これらの言語は、村の公共の場での公用語であったと思わせる節があり、これらの言語がまだ盛んに用いられていたとされる 20 世紀半ばにおいてはすでに日常生活の場ではもうあまり用いなかったのでないかと疑わせる情報もある。この点については、今後資料などを検討する必要があるが、ミランダ地方とは大きなちがいがあるのかもしれない。

ミランダ語は、ミランダ・ド・ドウロ郡を中心とする比較的小さな地域（人口 8000 人強）に分布する。この地域は、イベリア半島中央部に広がるメセタ高原の西端にあたり、地理的に孤立性の度合いが高かったことから中世の言語状態がよく保存されていたと考えられるが、1970 年台以降のポルトガルの民主化など近代化に伴い教育や高速道路網が普及、発達したことで急速に話者の数を減少させた。1995 年に正字法[11]が提案されるまでこの言語は文字を持たなかったが、1998 年の法律[12]で、この地域での言語権が認められるに至り、ミランダ地域では初等・中等教育への選択科目としての導入が始り、共通語化が進みつつあり、伝統的な形で伝えられてきた本来のミランダ語は急速に消滅しつつある。

[11]正字法が制定されたのは 1999 年で、コイネーの形成と語彙の整備を目的としてミランダ郡庁とリスボン大学言語研究所の共編になる Convenção Ortográfica da Língua Mirandesa として発表された。1995 年に Proposta が出され、2000 年に Adenda1、2002 年に Adenda 2 という追加条項が決定されている。

[12] 1998 年ミランダ言語法（全国法）が制定され、99 年に施行された。Lei n.º7/99 Reconhecimento oficial de dereitos linguísticos da comunidade mirandesa（ミランダ共同体の言語権の公式認知）と呼ばれるもので、ミランダ地域の文化財であり、伝達やアイデンティティーの強化の手段としてのミランダ語を認知し振興する目的で、①子供がミランダ語を学ぶ権利、②ミランダ・ド・ドーロ郡の公式機関がミランダ語訳をつけて文書を発行する権利、③ミランダ語や文化の教員養成を振興する権利を定めた法律。

ミランダ・ド・ドウロ郡庁が配布する資料によれば、郡の総人口は 8036 人であり、その内訳は以下の通りである。

Constantim	117	Atenor	172
Ifanes	205	Águas Vivas	230
Paradela	165	Silva	311
Miranda do Douro	2154	Genísio	233
Duas Igrejas	749	Malhadas	399
Vila Chã da Braciosa	391	Póvoa	244
Picote	371	S.Martinho	359
Sendim	1432	Cicouro	105
Palaçoulo	399		
		total	8036

伝統的なミランダ語は、ミランダ・ド・ドウロ郡内の 17 村落のうち 15 ほどで、特に 70 年代までに成人に達した層の大半に話されているとされるが、その点に関する詳細な調査や研究は今のところ存在しない。

Atenor と郡庁のある Miranda do Douro ではもともとミランダ語を話す人口は存在しないとされているので、ミランダ語を話す人口を擁する村落の総人口は 5710 人で、年齢構成や地域事情などを勘案すると、ミランダ語の伝統的な話し手は 2000 人に達しないと考えられる。これは Miranda do Douro は、ポルトガル側から移住した人たちによって構成されたためである。また、ほかに隣のヴィミオーゾ郡の一部でもミランダ語が話されるという報告のある集落も存在するが定かではない。ミランダ語の話し手はポルトガル語とスペイン語の 3 言語使用者であるが、年配のミランダ人でも必ずしもミランダ語を話すとは限らない。

この言語については、19 世紀末よりポルトガル言語学の創始者である Leite de Vasconcelos(1858-1941)やミランダ地域の言語や文化を中心に研究した António Maria Mourinho(1917-1996)などをはじめとし多くの研究があるものの、いずれも特定の地域の変種を取り上げて体系を記述したものや民俗学的観点に重心が置かれているものなど手法がアマチュア的でデータを資料として活用できないものも含まれており、必ずしも近代的な言語研究で要求される内容を満たしていない場合がある。従来よりミランダ語研究では、南部方言、中央方言、北部国境方言の 3 グループに分けて考えるのが慣例化しているが、この分類はかなり主観に基づくもので、客観的な言語地理学的データによるものではない。ミランダ地域では、規範的変種の形成やコイネー化などが起こらなかったため、地域内で

言語が漸進的推移を見せ、すべてのミランダ語話者はその言語特徴でお互いに数キロしか離れていないような出身村落を同定できると言われることがあるが、その真偽のほどや根拠となる具体的な言語特徴などについてはよく分かっていない。1970 年代から開始されたリスボン大学の言語研究所によるガリシア・ポルトガル言語民族地図のデータ収集においては、1500 ほどの語彙項目について全国的な調査が行われているが、ミランダ語に関連する地域はミランダ・ド・ドウロ郡内で 3 地点、ヴィミオーゾ郡の 1 地点とリオ・デ・オノール村、グアドラミル村の計 6 地点で、収集調査は終わっているものの、録音データの音声表記への転写ならびにそれに基づいた分析はまだ行われていない。これは財政的かつ人材的制約によるものである。

3. ミランダ語の特徴と研究史

ミランダ語は、Ĕ, Ŏ の二重母音化（> ie~ia, ue~uo）や語頭の L- の口蓋化（> λ ）、二重母音 ei, ou の存在などアストリア・レオン語の言語特徴を示し、母音間の -L-, -N- の脱落や Ĕ, Ŏ の二重母音化の不在などガリシア・ポルトガル語の典型的な言語特徴を示さない点でひとつの言語グループを構成するが、ミランダ語内部の方言間の特徴の差異も複雑でまだわかっていないことも多い。この言語については、以下のあげるように、1882 年以降、研究が行われているが、まだまだ不十分な点が多い。

José Leite de VASCONCELOS

1882 — *O dialecto mirandês. Contribuição para o estudo da dialectologia românica no domínio glotológico hispano-lusitano.* Porto: Livraria Portuense.

1900 e 1901a — *Estudos de philologia mirandesa, vol. 1 e 2.* Lisboa: Imprensa Nacional. 2ª ed. fac-similada comemorativa do cinquentenário da morte do Autor. Miranda do Douro: Câmara Municipal de Miranda do Douro, 1992 e 1993.

Ramón MENÉNDEZ PIDAL

1906 — *El dialecto leonés.* Oviedo: Instituto de Estudios Asturianos.

José Gonçalo Herculano de CARVALHO

1957 — Fonologia mirandesa I. «Biblos», vol. 33, p. 1-133.

1973b — Porque se fala dialecto leonês em Terra de Miranda. In: Estudos linguísticos, 2ª ed. Coimbra: Atlântida Editora. Vol. 1, p. 71-93. Artigo originariamente publicado com o título “Porque se falam dialectos leoneses em Terras de Miranda” na «Revista Portuguesa de Filologia», vol. 5., 1952, p. 265-280.

António Maria MOURINHO

Manuela Barros FERREIRA

Cristina MARTINS

CRUZ, Luísa Segura da; SARAMAGO, João; VITORINO, Gabriela

1994 — Os dialectos leoneses em território português: coesão e diversidade. In: Variação Linguística no Espaço, no Tempo e na Sociedade. Lisboa: Associação Portuguesa de Linguística/Edições Colibri, p. 281-293.

FERREIRA, Manuela Barros

1994 — A limitrofia do sendinês. In: Variação Linguística no Espaço, no Tempo e na Sociedade. Lisboa: Associação Portuguesa de Linguística/Edições Colibri, p. 35-42.

ポルトガル・ガリシア言語民族地図 Atlas Linguístico-Etnográfico de Portugal e de Galiza（ALEPG）では、これらの方言に関係し，次の地点で調査が行われている。

Duas Igrejas（mirandês central）	1990
Constantim（mirandês raiano）	1978
Sendim（mirandês sul）	1990
Rio de Onor（riodonorês）	1976
Guadramil（guadramilês）	1976
Campo de Víboras（Vimioso）（fala amirandesada）	1975

しかし、Cruz 1994 など ALEPG のデータからはミランダ語内部の方言差がはっきり出てこないし、伝統的な話し手の自然会話のデータ（録音）やそれに基いたコーパスの構築が行われていないというのが現状での問題点である。話し手の年齢を考えるとここ数年前後でおそらく調査は出来なくなるだろう。

4. 現地調査

筆者は 2007 年 10 月に、この地域の現地調査を行った。訪問地はミランダ・ド・ドウロ郡内と、リオ・デ・オノールとグアドラミルである。ミランダ・ド・ドウロでは、実際にネイティブスピーカーの協力のもとにミランダ語の自然会話を採取した。リオ・デ・オノールとグアドラミルは、予備調査であり、話し手の確認と今後の調査にむけた準備である。リオ・デ・オノールの前村長の Mariano 氏と協議した。この老人は、1976 年に行われた調査のインフォーマントであり、50 年代の研究書には青年としての写真が掲載されている。

ミランダ郡内では 3 日間自然会話の採取を行ったが、その記録は以下の通りである。

Informações sobre ficheiros de gravação em Miranda – 24-26 de Setembro de 2007

（Recolhista: José Pedro Ferreira、Gravador: Korg MR-1）

Dia 24/09

（１）Ficheiro: **2007092401**

Duração: 40m18s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Miranda do Douro

Situação: aula de mirandês na Escola Secundária de Miranda do Douro

Presentes:Duarte Martins (mir, pt)、José Pedro Ferreira (mir, pt)

Turma do 8º ano da disciplina de mirandês na ES Miranda do Douro

（２）Ficheiro: **2007092402**

Duração: 1h03m32m

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Miranda do Douro

Situação: conversa no bar de professores da Escola Secundária de Miranda do Douro sobre ensino do mirandês

Presentes: Duarte Martins (mir, pt), José Pedro Ferreira (mir, pt)
Naotoshi Kurosawa (pt, jp), Osamu Mizunuma (pt, jp)

（３）Ficheiro: **2007092403**

Duração: 1h22m53s

Formato: mp3 (192kbs)

Local de Recolha: Sendim

Situação: Jantar no restaurante “O Galego”

Presentes: Mãe de Orlando (mir), Orlando Galego (mir-pt)
José Pedro Ferreira (mir, pt), Naotoshi Kurosawa (pt, jp)
Osamu Mizunuma (pt, jp),

Observações: ruído elevado de televisão
informante principal ('mãe de Orlando') apenas aparece esporadicamente

Dia 25/09

（１）Ficheiro: **2007092501**

Duração: 2m27s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Aldeia Nova

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Vale de Águia (pt, mir)

Observações: informante a trabalhar. ruído de água.

（２）Ficheiro: **2007092502**

Duração: 9m01s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Aldeia Nova

Situação: pessoas param para responder a perguntas.

Presentes: José Pedro Ferreira (mir)、mulher 1 (mir, pt)、homem (pt, mir)
mulher 2 (mir)

Observações: ruído de carrinha do pão.

（３）Ficheiro: **2007092503a/b**

Duração: 15m32s + 2m19s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Paradela

Situação: conversa informal num café

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、
Homem (cunhado de Rui, saber nome) (mir)

Observações: café com televisão ligada; clientes conversam; microfone mal posicionado dificulta compreensão.

（４）Ficheiro: **2007092504**

Duração: 15m13s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Miradouro perto de Paradela

Situação: visita à entrada do rio Douro em Portugal, miradouro perto de Paradela. Homem procura perceber o que ali faz um helicóptero que viu da aldeia.

Presentes: José Pedro Ferreira (mir, pt), Homem 1 (pt)

（５）Ficheiro: **2007092505a/b**

Duração: 15m32s + 7m16s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Ifanes

Situação: homem a meio do trabalho para a conversar no meio da rua

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Homem 1 (mir)

Observações: ruído devido a mau encaixe de microfone.

（６）Ficheiro: **2007092506**

Duração: 14m11s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Cicouro

Situação: mulheres tricotam sentadas num largo.

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Mulher 1 (mir)、Mulher 2 (mir, pt)
Mulher 3 (mir)

（７）Ficheiro: **2007092507**

Duração: 2m18s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: São Martinho

Situação: Dona de café atende clientes

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Dona de café (mir, pt)、Cliente 1
(mir)、 Cliente 2 (mir)

Observações: mudança de registo e língua de dona de café entre clientes
habituais e recolhista.

（８）Ficheiro: **2007092508**

Duração: 23m37s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: São Martinho

Situação: Saída de café, pedido de informações; conversa com duas senhoras
que tricotam

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Dona de café (pt, mit)、
Cliente 1 (mir, pt)、Cliente 2 (mir, pt)、Mulher 1 (mir)
Mulher 2 (mir)

Observações: alguns minutos de permeio entre duas situações diferentes.

（９）Ficheiro: **2007092509**

Duração: 16m18s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: São Martinho

Situação: Pedido de informações sobre locais a visitar na localidade; pedido de informação sobre caminho.

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Homem 1 (mir)

Observações: Primeiro informante sofre de problema nas cordas vocálicas (intervalo entre situações); segundo informante é originário de Sendim e fala bastante baixo.

（１０）Ficheiro: **2007092510**

Duração: 15m58s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Póvoa

Situação: Conversa com pessoas que arranjam tractor; conversa com pessoas que estão sentadas à porta de casa.

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Mulher 1 (mir)、Homem 1 (mir) Mulher 2 (mir)

Observações: ruído de tractor na primeira situação; ruído de galinhas na segunda situação.

（１１）Ficheiro: **2007092511**

Duração: 8m18s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Malhadas

Situação: Pedido de informação a senhora que está dentro de casa a coser.

Presentes:José Pedro Ferreira (pt, mir)、Mulher 1 (pt)

Observações: Informante de Atenor; apenas fala Português.

（１２）Ficheiro: **2007092512**

Duração: 31m04s + 12m23s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Sendim

Situação: Conversa familiar

Presentes:José Pedro Ferreira (mir)、Albertina Moreno (mir)

Abílio Ferreira (mir, pt)

Observações: mudança de registo/língua.

Dia 26/09

（１３）Ficheiro: **2007092501**

Duração: 8m09s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Picote

Situação: Homem caminha na rua e pára para dar uma informação.

Presentes:José Pedro Ferreira (mir, pt)、Homem 1 (pt, mir)

Observações: algumas palavras em mirandês, maior parte em português.

（１４）Ficheiro: **2007092502**

Duração: 1m42s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Picote

Situação: Pedido de direcção

Presentes: José Pedro Ferreira (mir, pt)、Homem 2 (pt)

Observações: Apenas português.

（１５）Ficheiro: **2007092503**

Duração: 18m32s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Duas Igrejas

Situação: pedido de informação a um transeunte; pergunta pela qualidade da água de uma fonte a várias pessoas.

Presentes: José Pedro Ferreira (mir)、Homem 1 (mir)、Mulher 1 (mir) Mulher 2 (mir)、Mulher 3 (mir)、Homem 2 (mir, pt)

Observações: intervalos entre primeiro, segundo e últimos informantes.

（１６）Ficheiro: **2007092504a/b**

Duração: 31m04s + 12m39s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Miranda do Douro

Situação: Aula de mirandês

Presentes: Domingos Raposo (mir, pt)

Turma do 5ºB da Escola Secundária de Miranda do Douro

（１７）Ficheiro: **2007092505**

Duração: 21m10s

Formato: WAV (araw, 16bit)

Local de recolha: Fonte Aldeia

Situação: conversa entre pessoas apresentadas por familiar à porta de casa.

Presentes: José Pedro Ferreira (mir, pt)、Paulo Meirinhos (mir, pt)
Pai de Meirinhos (mir, pt)、Naotoshi Kurosawa (pt)
Osamu Mizunuma (pt)

Observações: conversa de fundo em português. léxico específico sobre tratamento dado aos carvalhos.

Dados dos informantes:

José Pedro Ferreira: 27 a; nascido em Vila Real/Sendim; residente em Lisboa. Todos.

Duarte Martins: 31 (?) a; n. ?; res. Malhadas; professor de mirandês. 2007092401/2

Orlando Galego: 29 a; n. Sendim; res. Sendim; trabalhador const. civil. 2007092403

Mãe de Orlando: ~65 a; n. Fonte Aldeia; res. Sendim; cozinheira. 2007092403

Homem Vale de Águia: ~65 anos; ?; ?; ?. 2007092501

Mulher 1 Aldeia Nova: ~60 anos, ?; ?; ?. 2007092502

Homem Aldeia Nova: ~65 anos, ?; ?; ?. 2007092502

Mulher 2 Aldeia Nova: ~80 anos, ?; ?; ?. 2007092502

Sogro de Rui - Paradela: ~70 anos; n. Paradela; res. Paradela; ?. 2007092503a/b

Homem 1 Paradela: ~70 anos, n. Mogadouro; res Paradela; reformado. 2007092504

Homem 1 Ifanes: ~60 anos; n. Ifanes; res. Ifanes; criador de gado. 2007092505

Mulher 1 Cicouro: ~60 anos; ?, ?, ?. 2007092506

Mulher 2 Cicouro: ~75 anos, ?, ?, ?. 2007092506

Mulher 3 Cicouro: ~85 anos, ?, ?, ?. 2007092506

Dona de café: ~35 anos; ?; ?; ?. 2007092507/8

Cliente 1: ~55 anos; ?; ?; ?. 2007092507/8

Cliente 2: ~45 anos; ?; ?; ?. 2007092507/8

Mulher 1 S. Martinho: ~70 anos; ?; ?; ?. 2007092508

Mulher 2 S. Martinho: ~60 anos; ?; ?; ?. 2007092508

Homem 1 S. Martinho: ~55 anos; ?; ?; ?. 2007092509
Homem 2 S. Martinho: 84 anos; ?; ?; ?. 2007092509
Mulher 1 Póvoa: ~60; ?; ?; ?. 2007092510
Homem 1 Póvoa: ~70; Malhadas; Malhadas; reformado. 2007092510
Mulher 2 Póvoa: ~70; Malhadas; Malhadas; reformada. 2007092510
Mulher 1 Malhadas: ~70; Atenor; Malhadas; reformada. 2007092511
Albertina Moreno: 84; Sendim; Sendim; reformada. 2007092512
Abílio Ferreira: 86; Sendim; Sendim; reformada. 2007092512
Homem 1 Picote: ~85; ?; ?; ?. 2007092601
Homem 2 Picote: 65; ?; ?; ?. 2007092602
Homem 1 Duas Igrejas: ~70; ?; ?; ?. 2007092603
Mulher 1 Duas Igrejas: ~75; ?; ?; ?. 2007092603
Mulher 2 Duas Igrejas: ~60; ?; ?; ?. 2007092603
Mulher 3 Duas Igrejas: ~85; ?; ?; ?. 2007092603
Homem 2 Duas Igrejas: ~60; ?; ?; ?. 2007092603
Domingos Raposo: 55; Malhadas; Miranda do Douro; prof. preparatório. 2007092604
Pai Paulo Meirinhos: ~60; Fonte de Aldeia; Fonte de Aldeia; reformado. 2007092605
Paulo Meirinhos: ~35; Fonte de Aldeia; Fonte de Aldeia; prof. primário. 2007092605

5. ミランダ語ポルトガル語対象テキスト例

マ タ イ 福 音 書 第２章		
ポ ル ト ガ ル 語	ミ ラ ン ダ 語	
	Traduçon de Bernardo F. Monteiro	**Traduçon de Amadeu Ferreira**
E, TENDO nascido Jesus em Belém de Judéia, no tempo do rei Herodes, eis que uns magos vieram do oriente a Jerusalém, Dizendo:	Tenendo puis nacido Jesus an Belen de Judá, an tiempo de l rei Harodes, benírun de l'ouriente uns magos a Jerusalen dezindo: - Onde stá l Rei de ls judius, que ye nacido,	Habendo Jasus nacido an Belen de la Judeia, ne l tiempo de l rei Harodes, uns magos de l Ouriente chegórun a Jerusalen i preguntórun: "adonde stá l Rei de ls

Onde está aquele que é nascido rei dos judeus? porque vimos a sua estrela no oriente, e viemos a adorá-lo. E o rei Herodes, ouvindo isto, perturbou-se, e toda Jerusalém com ele. E, congregados todos os príncipes dos sacerdotes, e os escribas do povo, perguntou-lhes onde havia de nascer o Cristo. E eles lhe disseram: Em Belém de Judéia; porque assim está escrito pelo profeta: E tu, Belém, terra de Judá, De modo nenhum és a menor entre as capitais de Judá; Porque de ti sairá o Guia Que há de apascentar o meu povo de Israel. Então Herodes, chamando secretamente os magos, inquiriu exatamente deles acerca do tempo em que a estrela lhes aparecera. E,	porque nós bimos n'ouriente la sue streilha, i benimos a adorar-lo? I l rei Harodes, oubindo isto, se turbou, i toda Jerusalen cun el. I chamando ls princepes de ls saçardotes, i ls scribas de l pobo, les preguntaba onde habie de nacer l Cristo. I eilhes le dezírun: - An Belen de Judá: porque assi stá screbido pul porfeta: - E tu Belen, tierra de Judá, nun sós la de menos cunsidracion antre las prencipales de Judá, porque de ti salirá l cundutor que há-de comandar e miu pobo de Israel. Anton Harodes, tenendo chamado secretamente ls magos, andagou deilhes cun todo l cuidado, que tiempo habie que les aparecira la streilha. I ambiamdo-los a	judius, que naciu por estes dies? Nós bimos la sue streilha n'Ouriente i benimos pa L'adorar." Quando soubo desso, l rei Harodes quedou mui albrotado i, cumo el, toda la cidade de Jerusalen. Anton, ajuntou todos ls príncepes de ls saçardotes i ls scribas de l pobo i preguntou-les adonde iba a nacer l Messias. Eilhes respundírun: «An Belen de la Judeia, pus assi fui screbido pul porfeta: "I tu, Belen, tierra de Judá, assi i todo nun sós la más pequeinha antre las prencipales cidades de Judá, pus de ti salirá un Xefe que guiará l miu pobo, Eisrael"». Anton, Harodes mandou chamar ls magos, an segredo, pa le sacar anformaçones subre la data cierta an que la streilha l'aparecira. Apuis, ambiou-los a Belen,

enviando-os a Belém, disse: Ide, e perguntai diligentemente pelo menino e, quando o achardes, participai-mo, para que também eu vá e o adore. E, tendo eles ouvido o rei, partiram; e eis que a estrela, que tinham visto no oriente, ia adiante deles, até que, chegando, se deteve sobre o lugar onde estava o menino. E, vendo eles a estrela, regozijaram-se muito com grande alegria. E, entrando na casa, acharam o menino com Maria sua mãe e, prostrando-se, o adoraram; e abrindo os seus tesouros, ofertaram-lhe dádivas: ouro, incenso e mirra. E, sendo por divina revelação avisados em sonhos para que não voltassem para junto de	Belen, dixo-les: - Ide i anformai-bos bien que nino ye esse: i depuis que lo houbirdes achado, beni-me-lo dezir para you ir tamien adorar-lo. Eilhes tenendo oubido las palabras de l rei, partírun; i lhougo la streilha, que tenien bido n'ouriente, les apareciu, indo adelantre deilhes, até que, chegando, parou suobre onde staba l nino. E quando eilhes bírun la streilha, fui altamente grande l prazer que sentírun. I antrando an casa, achórun l nino cum Marie sue mai, i abeixando-se até l chano l'adorórun: i abrindo ls sous cofres, le fazírun sues oufiertas d'ouro, ansenso i mirra. I habida repuosta an suonhos, que nun tornasse a Harodes, bolbírun por outro camino pa la sue tierra.	dezindo-le: «Ide i anformai-bos bien subre l Nino. Quando L'achardes abisai-me debrebe pa que tamien you baia alhá a adorá-Lo». Assi que oubírun l rei, metírun-se al camino. I la streilha, que tenien bisto ne l Ouriente, iba delantre deilhes, até que parou mesmo po riba de l sítio adonde staba l Nino. Quando bírun outra beç la streilha, ls magos quedórun mui cuntentos. I al antrar na casa bírun l Nino cula mai dEl, Marie. Azinolhórun-se delantre dEl i adorórun-Lo. Apuis, abrírun ls sous tesouros i ouferecírun-Le ouro, ansénsio i mirra. Tenendo sido abisados an suonhos pa que nun tornáran por casa de Harodes, eilhes bolbírun pa la sue tierra por outro camino.

Herodes, partiram para a sua terra por outro caminho.		